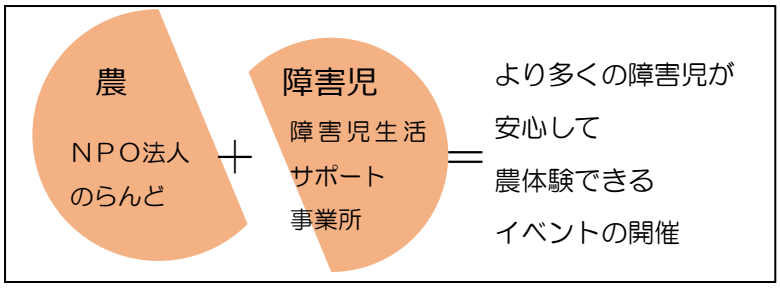
事　業　実　施　報　告　書

団体名：ＮＰＯ法人　のらんど
事業名：障害児生活サポート事業所や放課後等デイサービスと協同して開催する農体験イベント

１　事業の目的

① 障害児がもっと農業に関われる機会をつくる
② 農と障害児の事業所、協働のしくみをつくる
③ 農福連携を支える人材の育成へ向けて取り組む

２　事業内容
（１）事業の概要



「農」をテーマにするＮＰＯ法人のらんどと、「障害児」がテーマである障害児生活サポートや放課後等デイサービス事業所がコラボして、より多くの障害児が安心して農体験できるイベントを開催する。

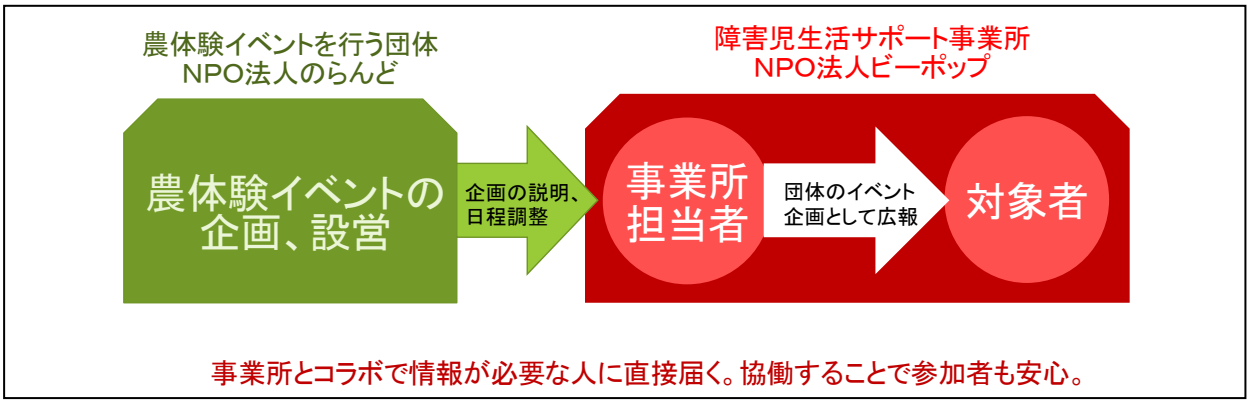
今回は、障害児生活サポート事業所を運営するＮＰＯ法人ビーポップとコラボした。

① 障害児がもっと農業に関われる機会を

農福連携が推奨されているが、障害のある児童が実際に農業に触れるのは、実習先として農業を行っている施設を選んだときということがほとんどだと思われる。高校生になって実習するまで農業に触れる機会はほとんどない。埼玉県では、農業を行っている施設が障害のある児童向けに体験のイベントなどを開催していることもあまりない。

早い段階から農業に触れることで、興味の対象や進路先としてもっと身近に感じられるようにすることが必要と考え、農体験のイベントを開催することにした。

② 農と障害児の事業所、協働の仕組み



農を担当する団体がイベントをつくり、それを障害児のための活動を行う団体の企画として利用してもらうことで、イベントの情報を対象者に効率的に届け、対象者が安心して参加したいと思えるようにすることができる。

今回はＮＰＯ法人のらんどがイベントの企画、準備、開催を行いＮＰＯ法人ビーポップは対象者への広報と、送迎や介助など当日のサポートを担当した。

③　農福連携を支える人材の育成へ向けて

福祉や農を学ぶ大学生にスタッフとして参加してもらうことで、人材育成につなげていく。今回は明治学院大学と連携し、学生ボランティアを受け入れた。

④　イベント会場「見沼田んぼ福祉農園」について

所在地：埼玉県緑区
運　営：見沼田んぼ福祉農園協議会
取り組み：「共に学び、共に生きる、共生の農業の実現」。地域資源を活かした土づくりや自然環境の整備、周辺農家との関係づくり、障害のある人の自立の足がかりとなる場づくり。

（２）事業の流れ

29 年 6 月　　：ＮＰＯ法人ビーポップとの打ち合わせ

7 月 29 日：農園でやってみよう①「藍のたたき染め」（参加者 11 名）

↑オリエンテーション

↑藍を観察

↑日陰で座ってたたき染め

9 月 12 日：農園でやってみよう②「しそジュースづくり」（参加者 10 名）

↑採ってきたしその葉をとる

↑休憩で農園をめぐる

↑しそを使って調理

11 月 12 日：農園でやってみよう③「里芋掘り」（参加者 12 名、学生ボラ 2 名）

↑常連参加者が準備体操を主導

↑鎌を使って

↑掘った里芋を抱えてニッコリ

30 年 2 月　4 日 ：農園でやってみよう④「パン作り」（参加者 16 名、学生ボラ 3 名）

↑小麦をみんなでこねこね。

↑焦げないように見守ります

↑焼けたぜ！

２月中旬　　反省会、来年度に向けた打ち合わせ

（３）連携・協力機関

ＮＰＯ法人ビーポップ、明治学院大学

３　成果及び今後の展開

（１）　成果

①　障害児の参加について

・最初の２回は２０代、３０代の参加者が多かったが、後半２回は学齢期の参加者も増えた。これは、ビーポップが障害の有無や年齢で区別しないポリシーにより、学齢期のひとだけでなく幅広い年齢層の人に広報されたためで、最初は普段から付き合いのある上の年齢層の人たちが多くなった。だんだん口コミで若い年齢層の人にも広まった。

②　コラボレーションについて

・のらんどとビーポップが役割分担することで、参加した対象者だけでなく、各法人のスタッフも安心してイベントに関わることができた。

・協働したＮＰＯ法人ビーポップ代表湯澤剛氏から「今年度かかわったほぼすべての人が、もっと農園に行きたいと話しています。私も『農』の枠をこえて『共生』や『協働』への指向を備えた素晴らしいプログラムだったと、参加できたことを本当に感謝しております。来年度も引き続きよろしくお願いいたします」とのコメントをもらうことができた。

・他事業所、特別支援学校の先生、子育てやＤＶなどの団体など興味を示すところが出てきた。

③　人材育成について

・明治学院大学の学生のべ５名を受け入れた。来年度も引き続きボランティアの受け入れを要請されている。

（２）　今後の展開

①　ビーポップ以外にもコラボレーションできる団体を募る

毎回３０人くらい参加者が集まるようにし、受け入れ方法を整備する。

②　対象年齢の参加者がもっと集まるように

障害の有無や年齢を分けなくてもよいが、特に対象児童に働きかけをしてもらう。

③　福祉、農業などいろいろな大学から学生の受け入れ

④　スタッフの充実

今回は２人のスタッフとボランティアだったが、毎回３人の主要スタッフが必要。

⑤　収穫より前の段階から体験できるなど、より「農」を体験できるイベントの企画。